

統計的な見方、考え方

統計課 横 須 賀 弘

私たちが、事の是非を判断するには、多くの場合自己の経験と知識のなかから決定の基準を求めることになる。したがって、経験や知識ならびに決定の基準に偏見があるとその判断は偏倚におちいることになる。日頃物事を正しくとらえ、観察することの訓練が大切なことはそうした意味からも重要なことといわれるところである。

こうした場合統計的観察という手法が採用され、学校教育の指導要領にも取り入れられるようになったのである。現在の小学生、中学生、高校生は、いわば将来の近代的社会人の母体である。彼等が正常な判断能力と知識を修得することによつて、次の世代の健全な伸長が期待できるのである。いわゆる統計教育というものが熱心に討議され、その円滑な普及が努められる所以でもある。

横浜のある小学校で、八手の葉はいくつに分かれているかについて観察が行なわれたが、その結果最も多かつたのは8ツでなく9ツであつたという。なかには、7ツ、6ツと様々な掌状があり、八手すなはち8ツにはつながらなかつた。

こうした日常なんの変態もない事象にも、正しい観察と判断によりそのものをさらに正しく認識することができるのである。統計教育というものが「あつめる」「まとめる」「よみとる」ことのよさを、子ども達にわかり易く知らせることを第一義とするのも、また、そのよさを他の諸問題解に体つてみようとする子ども達を育てるところにある。上述は学校における統計教育の一端であり、各教科のなかでも統計的な見方、考え方が浸透しつつある。しかし、心すべきことは、他を指導しようとするとき、あまりに意識過剰になると相手は興味を失い、そこから逃避してしまうことがあることである。おしつけや強制にはもはや感激はなく、むしろ当惑から発する嫌悪にはしりがちである。

統計業務に携はるものにとつても統計で重要なのは統計数値を土台にして、ものを考え判断しようとする態度が大切なのであり、そういう統計の見方、考え方は日常生活の周辺にあるものである。そして、統計というものが社会の中で どういう役割りを果しているかをもう一度認識する時機でもあろう。もともと、統計的方向には統計の見方、考え方といった思考活動の面と、もう一つ技能的な面とがある。われわれの周囲をみても一般に統計というと技能的なものだけを考へてしまう。そうした処理能力を有するものが、優れた統計マンであるとも思われ勝ちである。よく数字に弱いなどという言葉を目にするのも統計即技能面と解釈する査証とみることができるが、これからは、さらに統計的方向の中の思考活動ということこそ重要な役割りを担うものと思われるのである。このことは、われわれだけではなく社会人にとつても必要なことであり、だからこそ統計教育の比重も高まりつつこうした統計の見方、考え方こそ統計のすべての土台であらう。